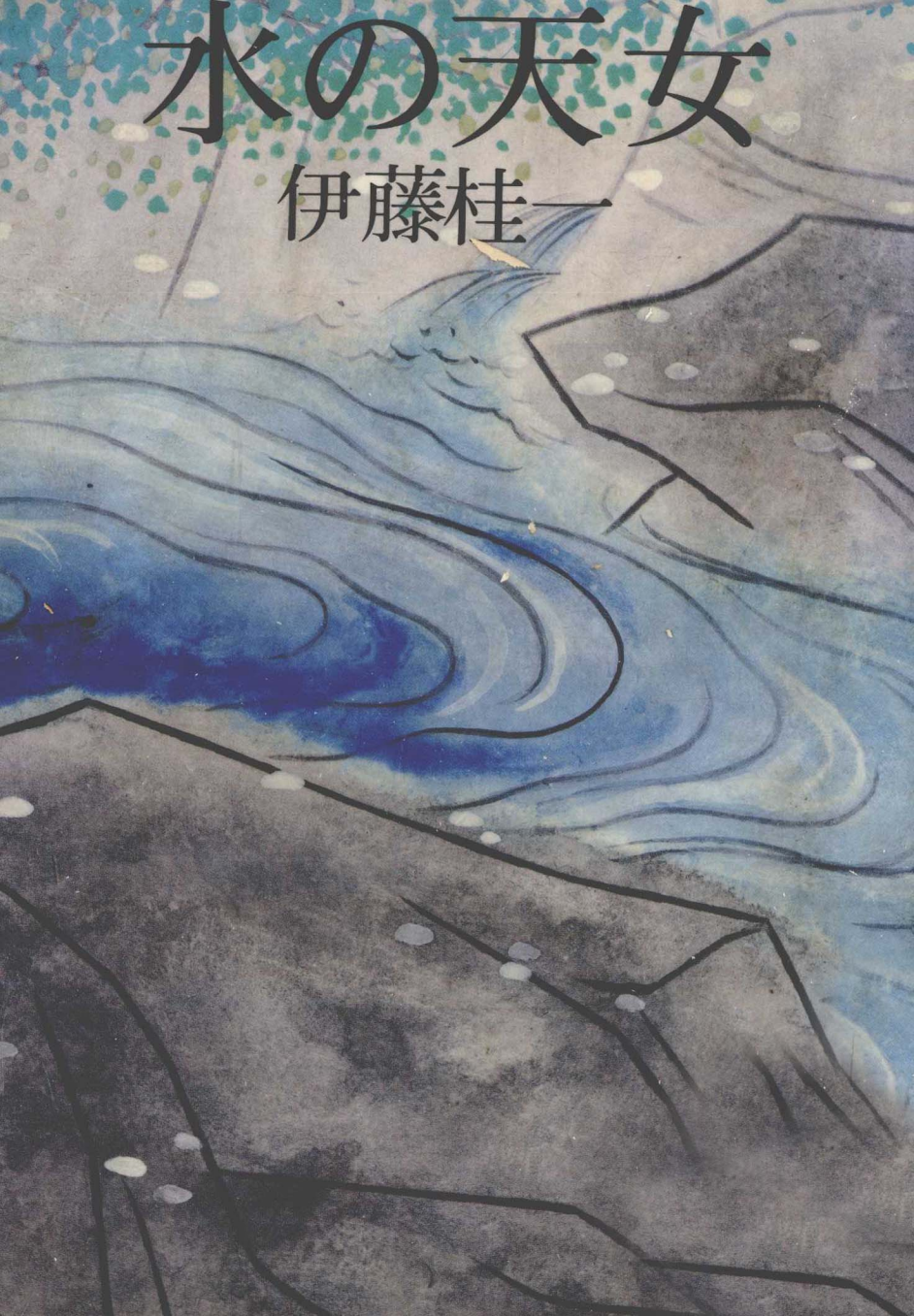
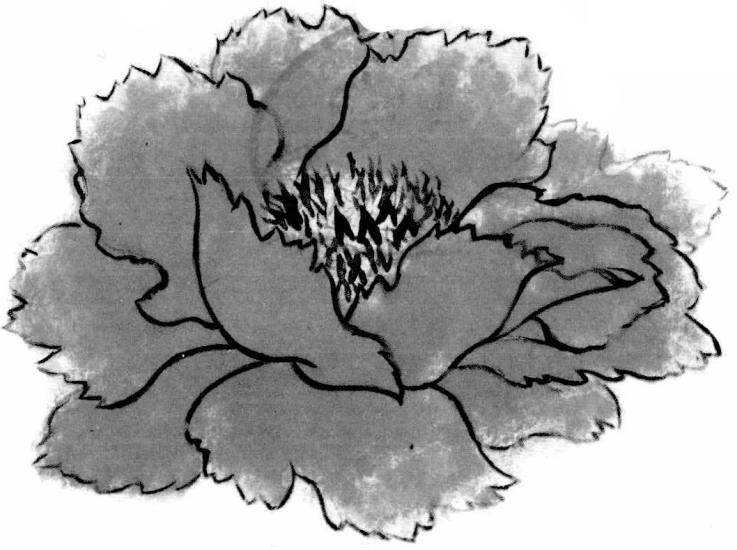
水の天女

伊藤桂一



水の天女

伊藤桂一



六興出版

水の天女

昭和五十四年十二月二十日　第一刷

著者　伊藤桂一
発行者　賀來壽一
発行所　株式会社　六興出版
東京都文京区水道二ノ九ノ二
電話東京(943)三四三一(代表)
振替　東京　一ノ九二四四八番

印刷　三秀舎
表紙　半七写真
製本　中央精版

© K. Itou
0093-07041-9216　Printed in Japan

短篇集「水の天女」目次

山女魚剣法　七
押絵の女　三
海底の天女　五
水の天女　七
時の司　一〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

牡丹の絵　一三三
かるわざ剣法　一六一
蜆（しじみ）　一八五
夕陽の渡し場　二〇五

装幀、佐多芳郎

水の天女

山女魚剣法

一

鹿乃江は藩の重役の娘だから、大造が試合に負ける毎に、遠慮なく小言をいった。たまには自分の恋人である大造の、颯爽としたところを見たかったのであろう。

「いつも、掛け声だけは人一倍立派ですが、勝負は一向ではございませんか。私は見ていてカッと頭に来て、自分で飛び出したくなってきます。勝った、ということは、まだ一度もないのでしょう?」

「ない、と思います」

「たよりない。それじゃ、結局は弱いということになりはしませぬか?」

「ま、そうです」

「恥ずかしいとも、残念だとも、お思いになりませぬか?」

「それは思います。が、こういうことも考えています」

いつも試合の終わったあと、鹿乃江が大造を誘うのは、山の中腹にある阿夫利神社の境内ときまっていた。藩の武道大会が近づくと、鹿乃江はこのお宮へ参詣を欠かさない。拝殿の棟に「必勝、甘露寺大造」と認めた祈願札が打ちつけてあるが、これも鹿乃江の手配によるものだ。大造は、それが人目につくと体裁が悪いといって、取り外してくれるよう鹿乃江に懇願したが、

「勝ったら、外してあげます」

というだけで、うけつけてくれなかった。

きょうも、その境内の一隅、松の根方に腰かけてのふたりの会話なのだったが、大造のいいたかったのは次のようなことだった。

「私のような身分の低い家柄の者が、あなたのような方にひいきにされると、とかく人の噂がうるさくて困ります。さいわい試合に負けているので、あいつは女に好かれても、金も力もない奴だと、笑われることによって、いくらかは人の気持を緩和している訳です。それで私は試合の日が近づくと、ああこれでしばらくは憎まれ方も少なくなると、実はほっとする位なのです」

「ふーん」と、鹿乃江は、いくらか人をバカにしたような顔をして大造をみた。大造をバカにしたのではなく、彼を笑う人たちに対してである。

「すると、あなたは承知していて、わざと負けているのですか?」

「いや、どう頑張ってみても、負けることは間違いなく負けるのですが」

「それじゃア、今おっしゃったことも、いわば負け惜しみのようにきこえます」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「ま、そういえば、そうですが」
「ほんとうに、たよりない」
鹿乃江は溜息をついたが、眼もとは涼しく微笑していた。素直で、つかみどころがなく、鷹揚な大造の人柄が気に入っていたのだ。
藩の武道試合は恒例の年中行事のうちでも最も大きなもので、出入りの商人からも多数の賞品が寄贈される。刀槍弓馬武芸十八般にわたる賑やかな催しだが、ともかく何をやっても大造の勝ったためしがなかった。顔立も引き締まっているし骨格もしっかりしている大造が、襷鉢巻に袴の股立を高くとり、余裕ありげに揚幕を割って出てくるところなどは、とうてい負けるとは思えない貫禄だった。ところが負け方も堂に入っていて、面を打たれるとコロリとひっくりかえる。
「剣術でなく、もっとほかの、あまり人のやらないことをおやりになったら？　薙刀だったら、組合わせの都合で、うまくすると女の人と立ち合えるかもしれません」
よくよく呆れたふうに、鹿乃江が思いきったことをいったりすると、そのくせ大造は顔色をかえて、
「どうしてそんな恥ずかしいことができますか」
といい返した。そのムキになるところが、鹿乃江にとっては、まだ頼りになるといえばいえるところだった。
鹿乃江が大造と知り合ったきっかけは、縁辺の祝い事に招かれて、父の隆角と連れ立っての帰

り途のことだった。城下町の端れから、腰に魚籠を提げ、釣竿を手にした大造が、ひどく気負った速足でやってきた。隆角は勘定方の取締格だが、大造はずっと下っ端で、いわば倉庫番のちょっと気の利いた程度の微役だから、ひどく畏まった挨拶をした。

「なんだ、魚釣りか」

といわれたのを、大造は咎められたものと勘違いしたらしく、鹿乃江が笑い出すほども恐縮して、しきりに頭を掻いて言い訳した。母親の好物なので、たまに出掛けて行く、今日も夕方の前後にかけて、ほんの一刻ばかり、といったが、魚籠は一ぱいで、尺を越えるかと思われるのは、魚籠から尾のところが突き出ていた。

「ほほう、みごとなものだな」

と隆角が魚籠を覗き込んで感心してみせると、

「山女魚です。風味は格別ですが、お持ち下さいますか」

というなり、型のよいものを四、五尾とり出した。隆角は辞退したが、大造はきかなかった。道端だし、魚を包むのに困惑したらしい大造は、いきなり自分の単衣の袖を破きとると、それに包んで鹿乃江に渡した。まさか着物を破るとは思わなかったので、ふたりは呆気にとられた。

「お荷物になりますが、どうか」

大造は愛想のいい笑顔で、ふたりにまた改まった挨拶をすると、そのまま急ぎ足になって別れたが、ふいと振り向き、

「その袖は明日頂戴にあがります。縫いつけて、また、着ますから」
といい添えた。

二

山女魚は渓流に棲む魚だから、よく身が締まって、味も淡泊でまことに舌ざわりがよかった。隆角は次の日、大造が夜になって訪ねてくると、座敷へ上げてなにかともてなし、大いに山女魚の味を賞めた。大造も上役に喜んで貰えて嬉しかったとみえて、これからも釣果のあがったときは、必ずお届けします、と約した。

「なんだか催促をしているようだが」

と、隆角は笑いながら、まだ新しい自身の単衣を一着、大造に与えた。大造は隆角の前でひどく厳しくつつましかったが、といっても悪堅くかしこまるだけでなく、話しかければ気楽に答えるし、僅かの間だったが、ひどく隆角の心証をよくした。

「みどころのある男だな。剣法に自信のある人間のような、心の安らぎがみえる」

あとで、隆角は鹿乃江に向いて大造をほめた。たぶんそのときに鹿乃江は、大造の強さ頼もしさを、自分の潜在意識のなかに持ったのかもしれない。

山女魚釣りの季節のつづくあいだ、大造はまめに釣果を運んできた。魚好きの隆角は、いつも倦きず賞味したし、ときには大造も一緒に御馳走になることもある。自然に二人の間柄もほぐれ、

大造と鹿乃江の仲も親密になった。
「剣法と、釣の技とは、関連するところがございますか」
と、座に侍って二人に酌をしながら、鹿乃江は大造にきいてみたことがあった。
「そうですね。あるといえばあります。私は……」
盃を置き、いくらか考え直すふりをしてから、大造は自身の体験のようなことを話した。
「――ずっと長いあいだ、山女魚を餌で釣っていました。春先から梅雨明けまでですが、それが過ぎると、魚の喰いが悪くなります。餌ですか？　みみず、くも、柳の幹やぶどうのつるに巣喰っている虫などですが。ある夏、夜明け前から陽のさす頃まで、谷を釣りのぼって、どうしたものか思わしい釣果がありません。あきらめて、石に腰をかけて一休みしていたのですが、水が激しく落ちこんでいる淵を何気なく眺めていましたら、黄色い蝶が一羽、その淵の上をゆっくりと舞ってきました。谷川を渡っていたのです。するとそのとき、とつぜん尺はあろうという大山女魚が、すさまじい跳躍で水を蹴って三尺も宙を飛び、あッと息を呑む間に、蝶を捉えてふたたび水音のなかに沈みこんだのです。水を跳ねる山女魚をしばしば見たことがありますが、あれほどもみごとな跳躍をみたことはありません。しかも狙いを誤またず蝶を捉えた壮烈な闘志、私は思わず竿をとって、山女魚の沈んだあたりに餌を落としましたが、ビクとも当たりがきません。山女魚は跳躍した一瞬に、身近に人影をみ、そのまま岩の陰深くに姿を隠したに違いないのです。こうなるともう、絶対に釣れないのですが、私はこのとき、ぼんやりとですが、山女魚の跳躍が

眼に映じた刹那に、それが剣の道にも通じる、ひとつの暗示を得たと思いました」
「蝴蝶剣とでも名づけたい剣の秘法でしょうね」
「いや、それほどでもございませんが」
鹿乃江の大袈裟な感嘆の仕方に、大造は苦笑した。
しかし、鹿乃江は、大造の編み出したるところの、蝴蝶剣なるものを、すっかり信用し切った眼元になっていた。大造も悪い気はしなかったが、あまり信用されても困るので、すぐに話を移した。
「その山女魚の跳躍で、もうひとつ考えたことがあります。つまり人為的に蝶を飛ばしたら、山女魚を誘うことができるのではないか、と思ったのです。それで次の機会に手製の網を持参して行き、いろいろな蝶などを採集して帰りました。あれこれと苦心の末、奇妙な鈎を幾つか拵えましたが、今度お目にかけたいと思います」
「なるほど、面白いこともあるものだな。それで、その鈎で釣れたのかな?」
隆角は、蝴蝶剣よりも、この方に興味を惹かれたらしい。
「はい。仰せの通りです。予想外にうまくいきました」
「うむ」
「ずいぶんと知恵のある方でございますこと」
鹿乃江の褒め方にはひどく実感がこもっていて、もはや信用以上のものが仄見えていたのだが、

大造は男女のことには鈍感で、一通りの関心としか受けとっていなかった。

大造と鹿乃江の間柄が急速に深まっていったのは、むろん鹿乃江の方が積極的だったからである。身分の低い大造にとっては、鹿乃江は美しすぎ物体なすぎ、たしかに有難迷惑なところも多かった。大造は鹿乃江を高嶺の花として眺めるだけで満足だったのだが、鹿乃江は世間態などは全く気にかけず、しまいにはひとりで大造の家にまで遊びにきた。

「大造の奴は、とうとう人魚を釣りおった。勤番を怠けて、釣った魚を持参して、恋の成就に使うとは、武芸十八般にもない秘芸ではないか。われらすべからく、剣をすてて山女魚を釣るべし」

いつしか藩中のそんな噂が、大造の耳にきこえよがしに入る。やりきれなかったが、まんざら嘘の種ばかりでもなかった。勤番を怠けた訳ではないが、高温無風曇天の日並で、今日は確実に良い、と思うと、お役目を同僚に交代して貰って、夕まずめにかけて釣に出かけたこともしばしばある。しかし交代の謝礼はちゃんとしたし、さして出世を願う気もないのだから、それほど悪いことをしたとは思えない。が、このことが隆角の耳にも入ったであろうと思うと、それだけは妙に辛かった。隆角はそんな素振りは何一つみせたことはなかったが、それだけによけい気になった。

大造が試合に負けるようになったのは、たしかに、つまらない嫉みやそしりを、それによって少しでも緩和しようとしたからかもしれない。

もっとも本来武芸が苦手で、負けることへのいい口実として、利用したのかもしれなかったが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com